



## 平成30年度 高知市教育研究所研究員入所式 平成30年5月22日（火）実施

研究員制度は、研究所設立以来、引き継がれている伝統ある取組の一つで、本年度64年目を迎えております。



### 今年度の研究員 テーマ (平成30年6月27日現在〔敬称略〕)



横田教育長から辞令書を受け取りました。

#### 教育相談



- ・ 全校一斉SSTを通して児童の対人関係スキルを育む  
鈴木ゆう子 (江陽小)
- ・ 不登校のチーム援助会議(三者支援会)での支援方針の合意形成過程における、保護者・教員の意識の変化  
三浦 文隆 (潮江小)

#### 授業研究



- ・ アプローチカリキュラムをつなぐスタートカリキュラムの試み 一保・幼・小連携した学びに向かう力の育成  
中村 早希 (江陽小)
- ・ 自ら判断できる子どもを育てる社会科(公民分野)の指導 一対立と合意の場面設定により思考力・判断力を高める授業の在り方  
宮本 康平 (一宮中)
- ・ 体育科における言語活動を生かした技能習得  
澤松 希奈 (高知商業)

#### 情報教育



- ・ 問題解決に向けて論理的に思考することができる児童の育成 一理科におけるプログラミング学習  
間城 美和 (高須小)
- ・ 理科教育において、課題解決につなげる電子黒板の活用  
上池 英司 (三里中)

#### 道徳教育



- ・ 対話でつながる道徳の授業の創造  
建沼 友子 (一宮中)

#### 人権教育



- ・ 共生力を身に付けた児童の育成 一世界の人権教育から学ぶ  
山本 哲治 (横浜新町小)

#### 特別支援教育



- ・ 院内学級におけるタブレット端末活用の事例研究  
柳川 美智 (三里小)  
戸田 仁美 (三里小)
- ・ 知的障害特別支援学級における主体的な学びのためのタブレットPC活用の事例研究  
水野 幸枝 (横浜中)
- ・ 子ども主体を目指した一人一人への手立ての最適化  
折付あゆみ (高知特支)

#### 学校事務



- ・ 学びを支援する学校事務 一教育活動の質を高める物品管理システムの構築  
小山 真純 (横内小)  
北添 那弥 (土佐山学舎)

\* 1年間の研究の流れ ゴールの姿を見据え、研究や実践を重ねていきます

研究計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	研究員決定	入所式 (5月22日)	全体定例会 (全領域) (6月7日)	定例会 (領域別)	中間報告会 (8月24日)	全体実践発表(公開授業等) 各領域における実践発表(公開授業等) 定例会(領域別)				研究紀要原稿 ・成果物提出	終了式 (2月15日)	研究紀要 完成・送付

### 学習会「学校が変わる・子どもが変わる I - 授業実践研究 -」

講師：高知大学 刈谷 三郎 名誉教授

今回の学習会は、教育論文の審査に多数取り組まれている刈谷名誉教授からご指導をいただきました。2回実施しているうちの1回目となる今回の学習会では、研究の具体的な取組や、教育論文作成のための心得を学びました。

#### 【今日からできる研究の具体的な取組(心がけと志)】

- ① よい授業を創造するためにはよい授業に学ぶこと。
- ② メモを残す。10年たてば世界で一つしかない資料となる。
- ③ 研修から研究へ転換し、アウトプットすることを恐れない。
- ④ これからの教員はクオリティが問われる。(教員の減少時代)

教師が子どもにどのような働きかけをして、何が変わったのかという、因果関係のある結論を書きましょう。  
善し悪しよりも事実をつかまえることが大切です。

#### 【論文の構成】「教育論文作成のための心得10」より 一平成29年度教育実践論文研究論文集掲載より抜粋一

- ① 問題提起、目的、方法、結果、考察、結論、文献、要旨などから成り立っていること。
  - ② テーマ(標題)は、何を研究しようとしているのかを明瞭に表現されていること。
  - ③ 目的(仮説)は、語句の定義、先行的事例のチェック、オリジナリティの発揮、普遍性を見いだすこと。
  - ④ 研究の方法は、誰もが再現・検証できること。客観的な手法として明確に記述すること。
  - ⑤ 研究の結果及び考察は、何が明らかになったのか。検証は客観的であること。(比較や先行研究と対比)考察は、なぜその結果が妥当であり、普遍性をもつのかを論理的に述べること。
  - ⑥ 結論は、テーマ(仮説)に対しての答えだと思って書くこと。
  - ⑦ 要旨は、目的から結論までが簡潔にまとめられていること。
- +α 「人の成果物をクレジットなしに表示することなく取り組むこと」を剽窃(ひょうせつ)と言う。  
細心の注意を払って、オリジナリティ溢れる論文を作成すること。

時代がみえる、子どもの心の動きがみえる、授業の先がみえる、自分自身がみえる

目的 新しい学習指導要領に対応した授業実践を目指した研修を実施することで、英語科教員の授業力の向上を図る

講義・演習「なぜ、研修を受けても変わらないのか。なぜ、言葉を教えようとするのか。なぜ、活動をつなげられないのか。」 講師：関西外国語大学 中嶋 洋一 教授

Tell me and I'll forget.  
Show me and I may remember.  
Involve me and I learn.  
-Benjamin Franklin-



「言われたことは忘れる。見たことは覚える。当事者になったら学ぶ。」

ベンジャミン・フランクリン

本日の課題（研修終了時のゴール）

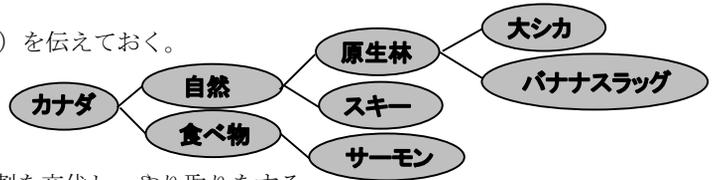
- 1 言葉を教える → 言葉を使わせる
  - 2 活動や技能が「点」 → 活動や技能を「リンク」させる
  - 3 知識レベルの研修 → 研修は自己決定の場
- ★「知っている」＝「できる」ではない。「習慣」になっていないことは、いつまで経ってもできない。

「聞く・話す（やり取り・発表）・書く・読む」の4技能  
5領域統合型の活動

演習：（活動例）Semantic Mapping を使ったInterview（3択）

- \* A, B, C, Dの4人グループで活動を行う（5分）
- \* 生徒にマッピングのバルーンの目標の個数（15個）を伝えておく。
- \* 三つのテーマから一つを選ぶ。

- ① My favorite country [マッピングの例] →
- 2 My favorite food
- 3 My favorite musician



- \* Aを中心に手順を説明をする。各回でペア内の役割を交代し、やり取りをする。

(1) <話す・聞く・書く活動> A & B, C & Dのペアで

① Bがテーマの一つを選択する。それについてAが5 W 1 Hの疑問文でインタビューし、Bが答えたキーワードをノートにマッピングで記録する。Aも同じ方法でBからインタビューを受ける。

② <①の振り返り>二人でお互いのノートのバルーンの数を見て、他にどんな質問をしたら話の内容が膨らんだかを振り返る。そして相手の情報を“He(She)～”を主語にしてノートに文章化する。

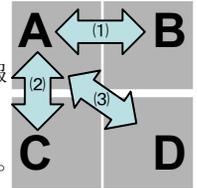
(2) <読む活動> A & C, B & Dのペアで

AとCが互いにノートを交換し、AはDの、CはBの情報を読む。この情報が次の話し相手の情報となるので、興味をもったことについて質問を準備する。

(3) <話す・聞く活動> A & D, B & Cのペアで

AがDに対して“I know your favorite～”と話を切り出し、聞き取った情報を基に質問をする。Dも同じ方法でAにインタビューする。（この言語活動のゴールはクイズ大会“Who is this?”）

\* グループ内での対話順



指導とテストの一体化を目指して —テストでは学習指導要領の「目標に準拠した評価」の目標を達成したか、評価規準に到達しているかどうかを見る—

現場では「言語文化の知識理解」が多すぎる。大切なのは四つのバランス。テストの構想（ゴール）が学期の最初に考えられていなければ本来、授業はできない。

\* テストにおける領域別出題の割合（例）

理解の能力（聞く）	20～30%
理解の能力（読む）	20～30%
言語文化の知識理解（語彙・文法）	20～30%
表現の能力	20～30%

1 コミュニケーションへの関心・意欲・態度

積極的にコミュニケーションをしようとする姿勢を評価する。授業の中で「書く・話す」といった「出力」の基準は、書いている分量が多いこと、辞書を調べたり教師に聞いたりして工夫をしていること、何度も挑戦しようとしていることなど。

2 外国語表現の能力

オリジナリティがあること。よって、テーマを与え、自分で考えさせる内容であること。What are you going to do this summer? Why? など。

3 外国語理解の能力

初出の英文の概要が聞き取れること、または読み取れること。よって、教科書本文を使つての読解の問題はALTに一部書き直してもらい、その部分から問いを出すようにするか、全く新しい読解の文章を考える。日頃の授業では、教科書本文や短いパッセージ（段落）をチャンキング（文節で区切って）で即読（聴）即解させる（訳さずに英語のまま頭から理解していく）訓練を日常的にしていけることが大事。

4 言語・文化の知識・理解

言語の割合は全体の約7割、文化の割合は約3割と考える。言語については言語材料（文法や語彙）を適切に理解しているかどうかを見るのがねらい。文化についてはテストで見るとよりも学期末のアンケート等で見ようにする。（例 英語と日本語はどこが違うと思いましたか？ジェスチャーの違いで分かったことは何ですか？）

【受講者の感想】

- ・ 改めて「最後のゴール」をしっかりとつこの重要性を確認できました。その目指す姿を確立したものにするために、とにかく活動させるということが大事だと思いました。今日はこの研修に参加させてくれたベテランの先生方に感謝しています。教員になって3年目で、この研修を受けることができてよかったです。
- ・ 授業進行案ではなく、学習指導要領を基に生徒がワクワクするような授業をつくっていききたいと思います。また、テストを前もって作成し、特に表現力を問う項目では、生徒が自由に書ける、オリジナリティを引き出せるような場面や条件設定をしていきます。